

平成30年11月6日(火)

明日は立冬です。

立冬＝二十四節気の一十九番目。太陽の黄経(こうけい)が225度に達する日を行い、太陽暦で11月7日ごろ。暦の上で冬の始まる日。

後期中間考査が本日予告されます。1週間後の13日から3日間(一部4日)の日程で行われます。

試験期間中は、早く帰宅して次の日のために学習をするのが必要だが、高校時代は、帰る道筋を変えてみて、日ごろ行ったことのない脇道などを散策する楽しみがあった。

久保町や、北目町界隈から始まり、一町目から六町目までの旧道を歩いたり、文化センター近くのキリスト教会や、競輪場西側の外人墓地、五色町から鎌田の夏井川の川筋や、新川川筋、柳町付近の裏通り、城跡の公園、ネズミ坂堀坂を下って、いろいろなお寺の墓地の中、桜ヶ岡公園の天田愚庵の住居跡など、かなりいろいろなところまで友人たちと散策した思い出がある。

一番見たかったのは、田町の界隈であった。そこは究極の知らない街なので、いったいどうなっているのか興味津々だった。

しかし、あくまでもそこは昼の田町であり、夜の顔は到底うかがい知ることもなく、路地裏に猫があくびしているのを見て帰る類の散策でしかなかった。

梶井基次郎の「檸檬」の一節のような雰囲気を楽しんでいたのかもしれない。

何故だかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまう、と言ったような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかっていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵があったりカンナが咲いていたりする。

梶井基次郎ついでに「檸檬」をもって、ヤマニ書房の本棚にでも置いていこうかと考えたこともあったが、停学になると怖いのでやめた。

「あ、そうだそうだ」その時私は袂の中の檸檬を思い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「そうだ」

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰って来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取

り去ったりした。奇怪な幻想的な城が、そのたびに赤くなったり青くなったりした。

やっとそれはでき上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまっていて、カーンと冴えかえていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

成功したら、どんなに素敵だったろう。檸檬を置いて、何食わぬ顔をして街に出たら、梶井の気持ちがわかったのかもしれない。